

C (小学校高学年向き)

題名 「もういくつ寝ると」

作者 おかだ あつこ

日だまりの縁側は、ぽかぽかと暖かでした。

庭木戸をくぐりぬけて、おとうちゃんが入ってきました。

縁側で寝ころんで本を読んでいたあつこに向かって、おとうちゃんが、だしぬけに聞きました。

「あつこちゃん、メリヤスって、どんな漢字を書くか、知ってるか？」

「なに？」

「メリヤスちゅう漢字や」

「そんなん、知ってるわけないやん」

「ものすごく大きい、という意味の莫(ばく)という字に、大小(だいしょう)とつけて、メリヤスって読むねんで」

おとうちゃんの目は、細く横にのびて、目じりがさがっています。あつこに、話しかけるときのいつもの目でした。

(おとうちゃんの笑いかた、やさしいて、ええなあ。わたしのこと、いっつもあつこちゃんって、呼んでくれはってうれしいなあ)

あつこは、返事をわすれておとうちゃんの顔を、ぼんやりと見つめていました。

「なにぽかんとしてんのん。莫大小(ばくだいしょう)と書いて、メリヤスと読むねんで。この漢字よう覚えときや」

おとうちゃんは、あつこの手の平に指で、莫大小(ばくだいしょう)と書きました。

「けったいな字いやなあ」

「そうやなあ。けったいな字いやなあ」

「そんなん。どこに書いてあっても、わたし読まれへんわ！」

「そんなこといわんと、よう覚えときや。あつこちゃんの好きな揚げたてのだんごは、(ばくだん)ちゅうんやったなあ。あれは、メリケン粉と砂糖と卵でできてるんやろ」

「そうやよ。揚げたて食べたらおいしいよ」

「(ばくだん)とちゃうで。ばくだいしょうやで。よう覚えときや」

おとうちゃんは、それだけいうと、いそがしそうに仕事場へ戻って行きまし

た。

仕事場から（ピーピーピー）という受信機の雑音が聞こえてきました。

おとうちゃんが、やきごてで、機械にハンダ付けをしていました。

（おとうちゃん、なんであんなこと言いにはったんやろ？ 忙しいときにい。なんか変やなあ）あつこは、ふとそう思いました。

もうすぐそこに、お正月がきていました。

新しい年を迎える前の楽しい行事に餅つきがありました。

暮れの二十九日は、苦がつくといわれていやがられていて、あつこの家の餅つきは、二十八日ときまっていた。

「ぺったんこ、ぺったんこの餅つきや」

と、おばあちゃんが声をはりあげると、

おかあちゃんが

「ほな、よろしいに」

とって、餅つきが始まりました。

おじいちゃんとおとうちゃんは、頭に日本手ぬぐいの鉢巻を絞め、おばあちゃんとおかあちゃんは、のりのきいた真っ白な割烹着といった姿です。

あつこと二人の妹は、大人達がいそいそと立ち働くのを、縁側に足をぶらぶらさせながら並んで見ていました。

もち米を蒸すせいろうから、勢いよく湯気がたちのぼってきました。

湯気のむこうに、鉢巻をしめたおとうちゃんの姿が、うっすらとかすんで見えます。台所は、白い霧につつまれて暖かくて、温室みたいになりました。

湯気が、鼻をくすぐってお腹の中に、ごぼごぼと入ってきました。蒸しあがったもち米を臼にあけると、おとうちゃんが杵を振り上げました。

ぺったん、ぺったん、調子の良い杵音のすき間をぬって、おかあちゃんが手水をさして、もち米に湿り気をつけています。

ぺったん、ぺったん、ぺったんこ。ぺったん。ぺったん。ぺったんこ。

つきたての餅が、おばあちゃんの手の中で、見る見る丸くなっていくのを、あつこは、飽きずにながめていました。

おかがみが大小 五組

まるもちが二うす これは、雑煮用

白ののし餅 二うす

あとは、青海苔、ごま、干しえびを入れたのし餅が、三うす これは、あられ用

それから、あべかわ餅、だいこん餅もちよっただけ
部屋いっぱい餅の行列ができました。

「今年もええおかがみさんが、できました。これで正月を迎えられます。へええ、おおきにご馳走さん」

と、おじいちゃんが、神棚に特大の鏡餅を供えてぽんぽんと柏手をうちました。

あつこは、二人の妹とおじいちゃんの大きな背中の後にならんで、

「おおきに、おおきに」

と手を合わせておがみしました。

「これでええお正月がくるねんでえ。あとはおとなしゅうええ子にしてたら、お年玉ぎょうさんくれはるよ」

あつこがおねえさんぶって妹達にいうと、

「そうや、そうや、ええ子や、ええ子や。お年玉ぎょうさんくれはるよ」

二人は、あつこのまねをして繰り返しました。

あわただしくて、楽しかった餅つきが終わると、家の中は急にお正月らしくなってきました。

床の間のかげ軸が高砂に、置物が鶴亀になり、大きな青磁の壺には松、白梅、黄菊、万両がいけられました。

ご祝儀用の金と銀の水引のかかったのし袋が、ねこ足のついた黒い台の上ののっていました。

あとは、玄関にしめ飾りをつるすだけになりました。

一夜かざりは、えんぎが悪いので三十日の夜に、つるします。

あつこは、まだうす緑色を残したままの稲わらで編まれたしめ飾りの香りが、とても好きでした。お正月の匂いがしました。

ぴんと張りつめた空気が、家の中に漂いはじめました。あつこ達三人が着るお正月用の晴れ着が、子供部屋のかもいにつるされています。強い樟腦の匂いが鼻をつきました。

年越しそばを食べ終わると、もうお正月が来るのを待つだけです。

「はよ、寝んと、お正月さんが、逃げていってしまうよ」

いつまでも寝ないでふざけている三人にふとんをかけながら、おかあちゃんがいいました。おかあちゃんの手は、あかぎれが出来て、赤くはれあがっていました。

「うん。わかった。わかった。お正月が、けえへんかったら困るもんなあ」

「そうや、そうや。おやすみ」

「そうや。おやすみ」

おかあちゃんは、三人が眠ったのを見とどけると、ほっとして部屋を出て行きました。おかあちゃんの後ろ姿を、あつこは、うす目をあけて見ていました。

(おかあちゃんの手、痛そうやったなあ)

あかぎれの出来たおかあちゃんの手を思い出しながら、眠ってしまいました。

元日の朝は、静かにすがすがしくあけました。

窓の外の、いつも見慣れているはずの風景が、お正月色にそめられて、どこか他の町に行ったような気がするのです。

あつこの枕元に、

莫大小のモモイ口の肌着です。新しい肌着を着てお正月を迎えよう。

あつこちゃんは四月から六年生やね。頼りにしています。

今年もよろしいに。おとうちゃんとおかあちゃんより。

と、おとうちゃんの字で書かれたメモと、包みがおかれていました。

包みをとくと、真新しいメリヤスの肌着がでてきました。

半袖モモイ口のシャツ 一枚

長袖モモイ口のシャツ 一枚

パンツ 一枚

長いパンツ 一枚

モモイ口の靴下 一足

「あっ、莫大小・・・やあ！ フ、フ、フ、わたし、メリヤスって、ちゃんと読めたよ。おとうちゃん！ ちゃんと読めたよ。ほんま、揚げたてのだんごと、ちごたわあ。(ばくだん)とちごたわあ」

あつこの顔に、笑みがぱあっと広がりました。

雑煮用の餅を焼く香ばしい匂いが、台所から流れてきました。

お正月が、飛びこんでやってきました。